



目	次
本学に導入された電子ジャーナル 利用のよびかけ..... 1	「明日のリーダーのためのデジタル・ライ ブラリ管理」セミナーに参加して...10
愛媛大学全学で利用できる 主な電子ジャーナル..... 5	農学部分館での図書館利用指導の 実施について.....11
電子ジャーナルの使い方 雑誌名から探す 6	附属図書館本館の臨時休館.....12
電子ジャーナルの使い方 論文を探す 8	附属図書館本館の臨時開館.....12
電子ジャーナル雑感..... 9	附属図書館委員会.....12
図書館の利用 - 電子ジャーナルについて -10	人事異動.....12
	図書館日誌（会議，研修）.....12

<http://www.lib.ehime-u.ac.jp/>

本学に導入された電子ジャーナル利用のよびかけ

柏 谷 増 男

1. 電子ジャーナル導入の経緯

愛媛大学附属図書館では，平成14年4月から，Elsevier Science社1,122誌，John Wiley社370誌，Springer-Verlag社396誌，Blackwell Pub.社594誌，Academic Press社228誌の電子ジャーナルを導入して，提供しております。このうちElsevier Science社分については，59国立大学附属図書館と共同してコンソーシアムを形成し，同社発行の約1,500誌のうちコンソーシアム加盟大学が購入している雑誌の相互利用の形で1,122誌が利用できるものです。なお，愛媛大学で購入していたものはこのうちの163誌でしたので，同社発行の数多くの学術雑誌を新たに読むことが出来るようになりました。Elsevier Science社以外の各社についても，従来愛媛大学で購入していた雑誌タイトル数は，John Wiley社30誌，

Springer-Verlag 社67誌，Blackwell Pub.社98誌，Academic Press社44誌（うち医学部は16誌）であったので，これら5社発行の閲覧可能雑誌数は411誌から2,783誌に大きく増えました。なお，Academic Press社については，当初医学部のみで利用可能という契約でしたが，その後同社がElsevier Science社と合併したため，来年からは全学で利用することが出来ます。また，電子ジャーナルが一般にいわゆる理系雑誌を多く含むため，これら5大電子ジャーナルの導入にあわせて，主に文系の学術雑誌117誌（従来の愛媛大学購入誌数56）の初号からのバックナンバーを取りそろえたJSTORをも導入しております。これらの電子ジャーナルの導入によって，従来ではアクセスの困難であったさまざまな分野の雑誌を研究室のパソコンで直接

に、しかも印刷前の最新号を世界同時に見ることができ、教職員、学生の皆さんの研究・教育の活性化のお役に立てるものと念願しております。

電子ジャーナルの提供はここ数年の間に急速に広まったもので、学術雑誌出版の最大手であるElsevier Science社が、当該年度の購読基準を満たしている大学に対してデモンストレーション用に同社発行の約1,200誌について無料トライアル（SD21）のサービスを始め、愛媛大学でも平成12年から利用できるようになって、先端的な研究情報を希求する研究者に大歓迎されていました。同社は平成13年末をもって無料トライアルを終了し、平成14年1月から料金を徴収する本格営業に入ることになりました。愛媛大学附属図書館では、冊子体から電子ジャーナルへの移行が国際的な学術雑誌の決定的な流れであること、電子ジャーナル導入大学とそれ以外の大学とでは研究環境に決定的な差が生じることを深く受け止め、可能な限りElsevier Science社をはじめとする有力出版社の電子ジャーナルを導入すべく交渉を重ねてきましたが、金額面での相違が大きく、従来の本学での雑誌導入システムのもとでは購入不可能との判断を余儀なくされました。この間、電子ジャーナル導入費の負担方法を附属図書館将来計画委員会でも精力的に審議していただきましたが、全学的な同意を得るにはいならず、Elsevier Science社の電子ジャーナルの利用については、単独導入を決めた医学部を除いて、平成14年1月からやむなく休止せざるを得ない状況となりました。そのため愛媛大学は研究面における重大な学術情報入手の危機に直面していたといえます。

この間、国立大学図書館協議会では、電子ジャーナルタスクフォースを結成し、上記の5大電子ジャーナル提供出版社とのねばり強い交渉と加盟図書館の連携への努力を重ねられてきました。その結果、旧帝大等の大規模大学は単独で、また地方大学はコンソーシアムを結成して連帯責任のもとで共同購入することにより、比較的有利に電子ジャーナルを導入しうる方策が見え始めてきました。この流れに呼応して、平成14年のはじめにはElsevier Science社の雑誌に対して大規模国立大学12大学が全タイトル単独購入を決定

し、その他の47国立大学がコンソーシアムへの加盟を表明するとの情報が伝えられるようになりました。このままでは、愛媛大学は全国60位以下の大学に成り下がってしまうとの危機感がつのり、附属図書館委員会では、何らかの形で全学的な財政支援を得て5大出版社の電子ジャーナルを導入すべく最大限の努力を重ねることを決議しました。

ちょうどこの頃、文部科学省でも先端科学分野での電子ジャーナル導入が不可欠との認識が強まり、平成14年度予算において特定分野に対する電子ジャーナル導入経費が計上されることになりました。同時に文部科学省では、今回の予算処置を“呼び水”として、広く学内で措置される経費を確保してより広範な電子ジャーナル導入に努めよとの指示が下され、このことは、精神的・制度的な面でもまた財政的な面でも愛媛大学附属図書館にとって強い“追い風”となりました。このような大学内外の情勢をもとに、愛媛大学附属図書館委員会では、愛媛大学財務委員会に対して電子ジャーナル利用負担金の共通的事業費化を要望することにこぎつけ、幸い、同委員会で各学部の深い理解を得ることができ、平成14年度より教育研究基盤校費の0.6%を電子ジャーナル利用負担金として支出していただけるようになりました。

現在、愛媛大学附属図書館は全国有数の電子ジャーナルタイトル数をほこっています。また、全国の多くの大学が財源を学長裁量経費に頼っているのに対し、利用負担金の共通的事業費化という形で、全学の理解が深くかつ安定した財源を確保していることによって、広く大学図書館関係者の注目を集めています。振り返ってみて、学部長、図書館委員を始めとした全学各学部の深い理解、財務委員会および同企画運営部会の方々、また背後の実務的な交渉でお世話になった経理部の方々、国立大学図書館協議会電子ジャーナルタスクフォースでご尽力いただいた他大学の館長および事務関係者、文部科学省情報課等学内外の様々な方々のご尽力のもとに、今日の電子ジャーナル利用環境が実現したことに深く感謝いたします。

2. 利用状況

すべての電子ジャーナルについての利用統

計が得られないため、代表的なElsevier Science社の利用状況を示します。図-1は、平成13年10月から平成14年6月までの電子ジャーナル利用状況を月別にまとめたものです。リクエスト件数は、同社の全雑誌約1,200タイトルが無料で閲覧できていた平成13年12月までのトライアル期間には約20,000件でしたが、医学部のみ閲覧が可能な平成14年1月から3月の間には月5,000件程度にまで低下しています。それが、コンソーシアム加盟館のいずれかが購入している全1,122タイトルが全学で閲覧できるようになった4月には一挙に約24,000件に跳ね上がっています。論文の全ページを閲覧または印刷した件数は月に約4,000件、また利用者数は延べ約3,000人となっています。本年4月以降の利用は、SD21（無料トライアル期間）に比べてやや増加しており、まずは順調な利用状況です。ただ、一昨年12月のアンケートによれば、電子ジャーナルを週1回は見ているという教官が約2割いるのに対して、電子ジャーナルの存在自体を知らなかったと答えられた方も約2割おられたことを考慮すると、新たな利用者の開拓が順調に進んでいるとは必ずしもいえないのではないかと懸念されます。

3. 電子ジャーナルあれこれ

電子ジャーナルをあまり利用されていない教官にその理由を尋ねると、「自分の研究分野では電子ジャーナルはほとんどない」、あるいは「関連の雑誌の数は限られており、購入している冊子体で十分」といった声がよく聞かれます。たとえ、その場合であっても、早く見られる利点に注目していただきたいと思います。私事ですが、筆者が良く利用する“Transportation Research”の場合、8月末現在で手元の最新の冊子体が7月号に対して、電子ジャーナルでは11月号を閲覧できます。11月号は行き過ぎと思われるかも知れませんが、電子ジャーナルの場合には編集完了段階で閲覧できるのに対して、冊子体では印刷、製本、輸送、取り次ぎ等の製造・流通過程が伴うため、このような相違が現れると考えられます。世界の研究者が電子ジャーナルを見ているのに、数ヶ月遅れの冊子体を見ているようでは研究競争に勝ち残れないのではないのでしょうか。日進月歩の先端的研究

分野ではなおさらと思われます。

電子ジャーナルはセット販売なので、自己の研究分野で従来あまり目にする機会がなかった雑誌を見ることがや、関連分野の雑誌を閲覧することも有利な点としてあげられます。散歩中に思いがけず立ち寄った書店で偶然興味深い本を発見することがあるように、パソコン上での散策で思いがけず刺激的な雑誌に偶然出くわすこともあるでしょう。

現在、愛媛大学附属図書館のホームページから閲覧できる電子ジャーナルのタイトル数は4,996誌です。おおまかな分類を見ると、

0	総記	41
1	哲学	65
2	宗教	29
3	社会科学	884
4	言語・文学	88
5	自然科学	1,500
6	医学	1,168
7	芸術	26
8	工学	935
9	地理・歴史	101

となっています（検索に使われている大分類と小分類が必ずしも合致していないので、上記0から9の合計と総数は一致していません）。電子ジャーナルは理系中心との先入観にとらわれず、人文・社会系の教職員や学生も大いにトライしてくださるようお願いします。

まず、愛媛大学附属図書館のホームページにアクセスして、「電子ジャーナル」の項目をクリックしてください。そうすると、「本学から利用できる電子ジャーナル」という見出しが現れ、その下に、雑誌の検索方法等の説明が出てきます。分野別の雑誌名を知るには、「Subject一覧参照」をクリックして、雑誌分野コードの番号を調べます。例えば音楽関係の雑誌ですと、雑誌分野コード番号は760ですので、「Subject-code」欄の空白部に“760”を入れると、Cambridge Opera Journal, Early Music, Journal of the American Musicological Society, Journal of Music Theory, Journal of New Music Research, Journal of the Royal Music Association, Music Analysis, Musical Quarterly, Opera Quarterly, Popular Music-Cambridge の10タイトルが出て来ます。「雑誌タイトル」の欄の空白部に“Music”

を入れて検索しても同じような結果が得られます。このようにして、さまざまな雑誌があることがわかり、さらに見たい雑誌名をクリックすると、その雑誌に掲載されている論文を、写真や図を含めて全文見ることが出来ます。(一部抄録しか見えないものもあります。)

少し脱線して、勝手に雑誌散策を始めてみましょう。自分の研究分野以外には不見識であることをお許し願いたいのですが、オペラに関する専門的な学術雑誌が2つもあるのは驚きです。“Performing Arts”を検索すると、American Journal of Dance Therapy, Dance Chronicle, New Theatre Quarterly, TDR-the Drama Review, Theatre Research International, Theatre Survey の6件が出ます。しかしながら、“Photography and Cinematography”や“Fashion”では検索件数は0と出てきます。たまたま愛媛大学附属図書館が集めている電子ジャーナルに偏りがあるのでしょうか。利用者からの要望があればこの分野の電子ジャーナルを探す必要があります。

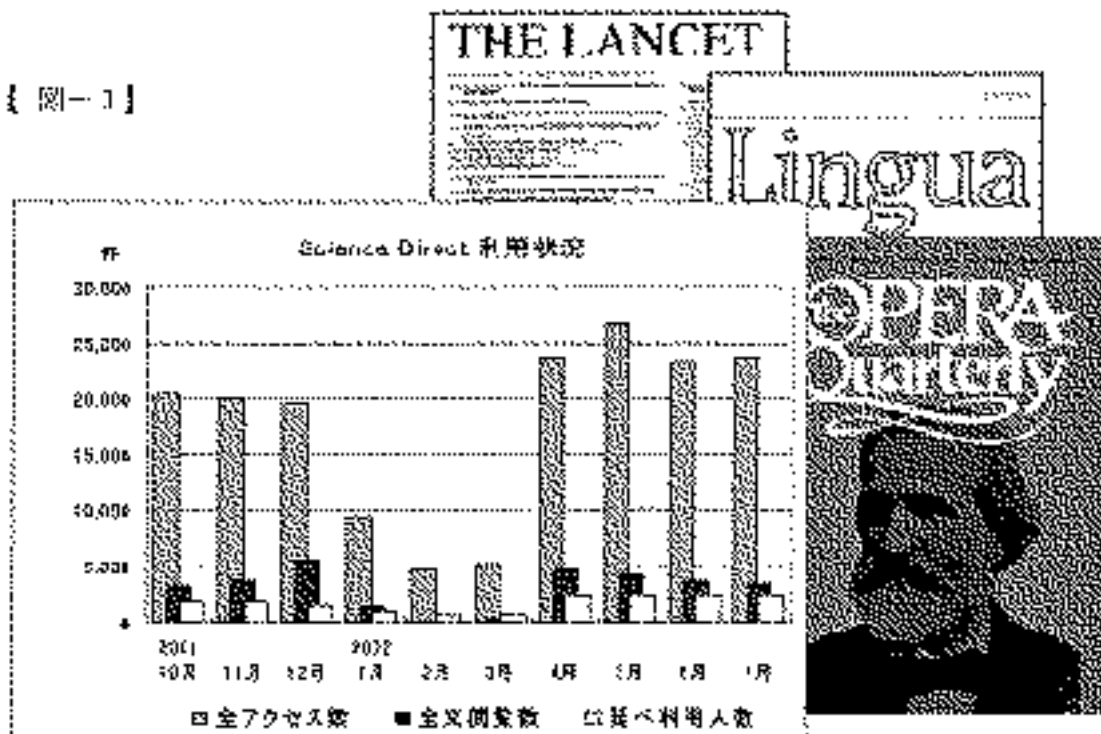
個別のタイトルを見ると、「Lingua」という雑誌があります。辞書によればLinguaとは舌のことのようです。舌の専門雑誌があるのかなと思ってしまいます。ちなみにこの雑誌は愛媛大学で冊子体を取っています。

「Museum Management and Curatorship」という雑誌がありますが、Curatorshipという言葉がわからないので辞書を引くと、Curatorとは博物館、図書館などの館長のことと書いてあり、どうやら館長たるものの心得に関する雑誌のようで驚いたり、かしこまったりする次第です。「The Cornell Hotel and Restaurant Administration Quarterly」はやはりきわめて専門的な雑誌なのでしょう。ユニークな学科の多いCornell大学ならではの雑誌かと感心してみたり、山の中のちっちゃなIthacaの町に住んでいて本当にホテルやレストランの良さがわかるのかな？と余計なことを考えてしまいます。「The Lancet」のLancetという言葉がわからないので辞書を引くと、両刃のメスという訳語とともに、医学雑誌の名前のことと記されていたので、よほど有名な雑誌なのでしょう。「Antipode」、意味がわからなく、やはり辞書のお世話になると、“正反対のもの”と出てきました。やはりわかりません。

たまには、暇にまかせて学術雑誌の森をさまよってみるのもいかがでしょうか。犬も歩けば棒にあたる。案外、びっくりするような面白い雑誌に出会うかも知れません。机の上のパソコンを開いて、気軽にトライして下さい。

(かしわだに ますお 附属図書館長)

【図-1】



愛媛大学全学で利用できる主な電子ジャーナル

(2002年9月30日現在)

出版社	サイト	タイトル数	URL
Elsevier	Science Direct	約1,100	http://www.sciencedirect.com/
Springer	LINK	約390	http://link.springer.de/
Wiley	Inter Science	約370	http://www3.interscience.wiley.com/
Blackwell (STM)	Synergy	約330	http://www.blackwell-synergy.com/
Blackwell (SSH)	ingenta	約260	http://www.ingenta.com/
Oxford Univ.	-	約200	http://www3.oup.co.uk/jnls/online/
JSTOR	-	117	http://www.jstor.org/

1. Elsevierグループ

利用サイトのScience Direct には、Elsevier Science、Pergamon、North Hollandなどが出版する学術雑誌のうち約1,500誌が収録されていますが、本学はそのうち約1,100誌について全文が閲覧できます。タイトル一覧で、タイトルの先頭に緑色のアイコンが表示されているものが、全文が閲覧できるタイトルです。それ以外のタイトルについても、目次と抄録は閲覧できます。(他のサイトも同様です。)

なお、同社によるAcademic Press の買収に伴い、現在医学部で契約しているIDEALは、2003年からScience Direct で利用することになります。

2. Springer

Springer-Verlag、Birkhauserなどが出版する学術雑誌約390誌について、全文が閲覧できます。

3. Wiley

John Wiley & Sons などが出版する学術雑誌約370誌について、全文が閲覧できます。

4. Blackwell (STM collection)

STM (Science, Technical & Medical) collectionは、旧Blackwell Scienceが出版していた学術雑誌のコレクションで、約330誌について全文が閲覧できます。

5. Blackwell (SSH collection)

SSH (Social Sciences & Humanities) collectionは、旧Blackwell Publisherが出版していた学術雑誌のコレクションで、約260誌について全文が閲覧できます。なお、このコレクションの利用サイトであるingenta (インジェンタ) は、他のサイトと違い、Blackwell以外の多数の出版社の電子ジャーナルを提供していますが、全文が閲覧できるのはこのコレクションのみです。

このコレクションは Synergy に統合される予定です。

6. Oxford University Press

国立情報学研究所が、2003年3月までの予定で全国トライアルを実施しているもので、約200誌について全文が閲覧できます。

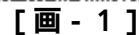
7. JSTOR (ジェイストア)

利用度の高い学術雑誌のバックナンバーを提供することを目的としているサービスです。このため、最近数年分については提供されません。本学では、117タイトルについて契約しています。

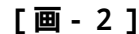
このほかにも、冊子購読している学術雑誌で、電子ジャーナルが利用できるものが多数あります。附属図書館のホームページから検索してみてください。

<雑誌名から探す>

<http://www.lib.ehime-u.ac.jp/>



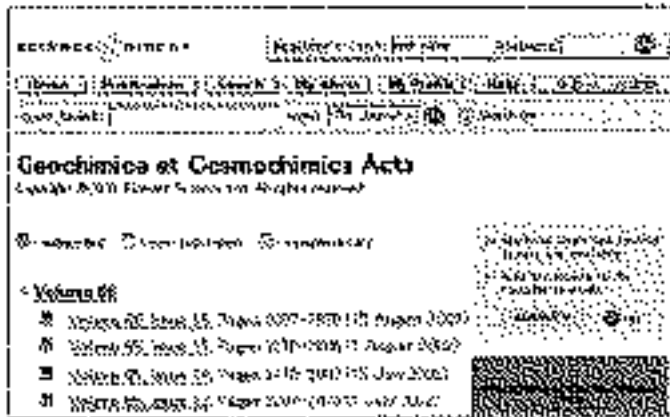
中にはIDとパスワードが必要な電子ジャーナルが含まれているため、「IDとパスワードが必要な電子ジャーナル」から一度確認しておいてください。



タイトルをクリックすると電子ジャーナルを見ることができます。

[画 - 3]

冊子体に印刷されているままの状態です。



【画 - 4】

4. 2002年8月20日に検索を行っている時点で最新号66巻19号までみることができます。



【画 - 5】

5. 画像3の検索結果の右側にあるOPACのところをクリックすると、愛媛大学の所蔵情報がわかりますが、66巻14号までしか入ってきてないようです。

冊子体は愛媛にやってくるまでに取次店や海を渡らなければならないため、時間がかかってしまいます。電子ジャーナルを利用すると、世界との時間の格差なく情報を得ることができます。

【よくある質問】

- 電子ジャーナルが見られない。
 - インターネットエクスプローラの場合、セキュリティレベルを下げてください。
- リンクが切れている。
 - 図書館までご連絡ください。
[連絡先：システム管理係 system@lib.ehime-u.ac.jp (内線：8841)]
- プリンタに出力できない(文字がきれいにでない)。
 - 他のアプリケーションを終了させた後、もう一度出力してください。同じ結果になる場合、パソコンを再起動して再び試してください。
- PDFファイルが開かない。
 - Acrobat Readerをインストールしてください。Acrobat ReaderはAdobe社から無償で提供されています。
- Acrobat Readerを入れているのにPDFが開かない。
 - 他のサイトも同じ状況であれば、Acrobat Readerを入れ直してください。
 - インターネットエクスプローラのバージョンが5.01以下の場合、最新バージョンにしてください。

電子ジャーナルの使い方

<論文を探す>

電子ジャーナルのサイトには、タイトル、著者、キーワード、本文などから論文を検索する機能があります。対象はそのサイトに収録されている雑誌の論文に限られますが、大変に便利な機能ですので、ぜひ活用してください。

ここでは、Science Direct を例に、論文の検索機能を簡単にご紹介します。Science Directは、検索機能が充実しているサイトで、次の3つの方法が提供されています。

1. Quick Search

ほとんどのページに用意されているもので、気軽に検索機能を使うことができます。特に、各ジャーナルのトップページではそのジャーナルのみが、目次ページではその号のみが初期の検索対象になりますのでとても便利です。



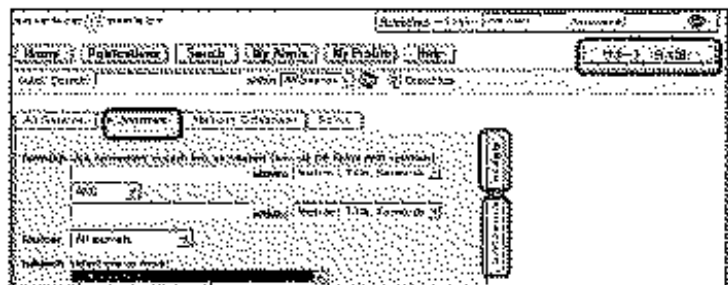
2. Basic Search

Searchボタン、Journalsタブを順にクリックするとこの検索画面になります。

この検索では、次の特徴があります。

- 1) 検索対象とするフィールド（タイトル、著者名、抄録、本文など）を設定できる。
- 2) 検索語を2項目まで設定でき、それらの関係を、AND・OR・AND NOT から選べる。
- 3) 分野、出版年、巻号等を限定できる。

なお、1つの項目にスペースで区切って複数の単語を入れた場合、全体で1語（フレーズ）として扱われること。前方一致の記号が「!」であること。任意の1文字を表す記号が「*」であることに注意してください。



3. Advanced Search

Basic Searchの画面から、右側にあるAdvancedタブをクリックします。

この検索では、検索条件を文として直接入力します。括弧や論理演算子によって細かい条件指定ができるだけでなく、近接演算子という高度な機能も用意されていますので、精度の高い検索が可能です。

たとえば「(genes OR chromosomes W/ 5 splicing) OR cloning」は、

「genes またはchromosomes が、splicing から5語以内に現れるもので、かつ cloning を含む論文を検索する」という意味になります。

詳細につきましては、日本語のサポートページ（右上の「サポート（日本語）」ボタン）の中の「ユーザズマニュアル」、「検索のヒント」をご参照ください。

検索をはじめとして、電子ジャーナルのサイトの使い方は、サイトごとに違ってきます。附属図書館では、電子ジャーナルをより良く使っていただくため、ホームページで使い方をご紹介しますので、ご活用下さい。

電子ジャーナル雑感

松 永 達

関係者の尽力により、本学でも欧米の出版社が提供する電子ジャーナルの利用環境が整えられるようになった。実際に使ってみると、やはりこれは非常に便利な代物である。日頃使い慣れた研究室のパソコンから、直接、必要な論文にアクセスできる。印刷もすぐできる。冊子体からコピーするとなるとけっこう手間ひまがかかるが、電子ジャーナルならばパソコンのキーを一回たたただけでよい。印刷の設定も自在である。そして何よりも、最新の論文が発表されてからすぐ読める。冊子体のように図書館での手続きを待たなくても良いし、また配架されてからも、書架にない時にいつ戻ってくるかと気を揉む必要もない。また、最新の論文だけではない。文系の場合、過去の論文をじっくり読み直すことも多いが、ジャーナルによっては、創刊号からアクセスできる。19世紀末の著名な論文が、オリジナルの文字や版型のまま印刷されて、研究室のプリンターから出てきたりする。この間まで、埃で指先が真っ黒になりながら薄暗い書庫で古いジャーナルを引っ張り出して、ページをめくっていたことを思うと、ちょっと感慨深いものがある。

しかしながら、便利さには代償がつきものである。電子ジャーナルの提供は、ジャーナルの出版社の慈善事業ではもちろんなく、新たな利益確保に向けた戦略のようだ。電子ジャーナルの利用料が巨額に上り、大学の既存の予算配分のやり方では負担が困難な金額になっているが、どうもこの高騰には腑に落ちない所がある。世界的に権威のあるジャーナルを含むコレクションなら、利用料がいくら高くても、研究のためには導入せざるを得ない。買い手に選択の自由がないのに売り手は自由に価格をつけられるという、古典的な独占の弊がここに現れている。売り手の行為を直接規制できないのなら、せめては、出版社と電子ジャーナルを提供する会社を完全に分離して、前者は後者への「卸」に徹し、後者は出版社とは独立に様々なジャーナルの組み合わせと価格で競争すれば、少しは問題が緩和されるかと思うが、これも利用する側の力の及ぶ話ではない。この電子ジャーナルの提供のように、知的財産を軸にして利益を上げていこうとするのは、ものづくりが衰退した裏返しでもあるが、最近の英米の戦略とも言える傾向である。商業的な意味での知

的財産というのは、立ち上げるのに時間と労力がかかっても、いったん築き上げたら、独占的な利益を享受できる一方で維持コストが低い。過去の優れた論文の集積がものをいうジャーナルの格の確立はこの典型である。英米の学術系出版社はなかなか機を見るに敏なようだ。

腑に落ちないのはこれだけではない。電子ジャーナルは単体ではなく、多くのジャーナルのコレクションとして提供されている。そして冊子体で購入しているものについては電子ジャーナルとしても利用でき、さらに基準年の冊子体の購読額を維持しながら少なからぬ追加料金を払えばコレクション全体を利用できるというシステムになっているようだ。この課金の仕方はともかく、これで冊子体で購読していないものも利用できるわけであり、電子ジャーナル導入の大きなメリットの一つがここにある。しかし、このコレクションのタイトル一覧を眺めていると、聞いたことのない、発刊されて間もないタイトルも少なくないのに気が付く。中には発刊予定のものも含まれている。研究者にとって発表機会が増えるのは歓迎すべきことだが、これが欧米で早くから進行している業績評価強化のなせる業だとすれば、手放して喜べない。日本の国立大学が多額の税金（と授業料と国の借金）を使って全タイトルを購入することが、新たなジャーナル創刊にいくらかでも寄与しているとすれば、日本の研究者も、外国語で書くというハンディと新刊のジャーナルのステイタスはさておき、どんどんこれに投稿しないと、よその国の研究者ばかりが得をすることになる。もちろん、こうしたジャーナルの刊行がいつまで続くかはわからない。ほかにも気になる点がある。出版社はすでに、どのようなジャンルの論文にどれだけのアクセスがあったか、膨大な情報を手にしているはずである。いうまでもなく、需要動向の分析は新商品開発に必須であるが、こうしたやり方が学術出版にも持ち込まれないとは限らない。

電子ジャーナルはまだ導入の緒に就いたばかりで、今後しばらくは、提供の仕方もうろいろと変わるだろう。しかし、論文の入手・発表という研究の基礎のありかたが大きく変容してきたのは確かのようなのだ。

（まつなが たつし 法文学部助教授）

図書館の利用 - 電子ジャーナルについて -

鈴木 由香

なんでもかんでもデジタル化され、コンピュータが進出してきて、鬱陶しいと感じているのは私だけではないでしょう。携帯電話も便利だけれど、私はすぐに連絡が取れないと、おおごとになってしまうような人間でもないし、連絡相手が簡単に捕まるために、むしろ人との間合いが取りにくくなっているように思います。手紙を書いて、封筒に入れて、ポストに投函して、という手間があるからこそ、手紙を戴くと相手の思いが伝わってきます。自分でも、こんな自分のことを時代の進行のペースに取り残されているアナログ人間だなと思います。それなのになぜ電子ジャーナルを勧める文章がかけましょか！

情報は紙に活字として印刷されている方が安心感があり、正しいことのような印象を受けないでしょうか？それでも、やはり電子ジャーナルになって助かった、よかったと感じることがあります。電子ジャーナル利用の第一の利点は、なんと言っても情報の速さです。雑誌によっては、冊子になって届くより一ヶ月以上も早く読むことができます。研究者にとっては迅速ということが非常に重要だと思います。第二には、いつでも、どこでも閲覧できるという点です。仕事をしていて気づいたら、もう9時を過ぎてしまった。「あ～、図書館行こうと思っていたのに。」という経験をしたのは、一度や二度ではありません。インターネットに接続しコンピュータを立ち上げれば、そこが図書館に変身するという状況は大変に魅力的です。第三点としては、電子ジャーナルの導入により、利用できる雑誌が増えたことです。欲を言えばもっと欲しいところですが、全ての分野の研究者が満足するということは難しいということも理解できます。第四としては、インターネットを使用することによる検索機能や、それぞれ

の文献に付帯するリンク機能が使用できるということです。キーワードがうまく引っ掛けられなくて、検索が難しい時も、ひとつ文献が見つければ、そこからリンク機能を利用することで知識の輪を広めることができます。第五点は検索してきた文献や資料が多い場合に、そのまま保存してしまうことができるということです。またその文献を利用するときもコピー機能を利用すると簡単に検索することができます。

利点を挙げてきましたが、では欠点はないのでしょうか。欠点の第一として、実際に紙に打ち出されたものの方が安心感があり、線を引いたり、付箋紙を貼ることで自分の理解や記憶を深めることができるということがあります。そのため、私はコンピュータを使用してもいまだにペーパーレスにすることができません。ある意味、二度手間でしょうか。第二点は、前述と関係しますが、プリンターの機能が優秀でないと、画像や写真を打ち出した際、不明瞭であったり、時間がかかるということです。第三としては、活字信奉者といえど、まずコンピュータを使う必要があることでしょうか。純粹に便利なものとして利用できるようになるには、まずはコンピュータを立ち上げるというハードルを越える必要があります。

結局私は、物事がデジタル化されていくことに賛同しているのでしょうか？それとも反発しているのでしょうか？システム利用の仕方をやっと理解したと思うと、システムが変わってしまい、また振り出しに戻ってしまうこともあり、戸惑うことも多くあります。情報の媒体が急速なスピードで変化している時代ですので、自分の情報収集環境を快適にする努力は必要なのだろうと感じています。

(すずき ゆか 医学部小児科医局院生)

「明日のリーダーのためのデジタル・ライブラリ管理」セミナーに参加して

福 居 みのり

7月4日にエルゼビア社主催のTicerセミナー「明日のリーダーのためのデジタル・ライブラリ管理」に参加させていただきました。

Ticerとはヨーロッパの中でも早くからデジタル・ライブラリプロジェクトに着手したオランダのティルブルグ大学の図書館とコンピュータセンターが図書館業務コンサ

ルタント等を目的として設立した民間会社です。(Ticer=Tilburg Innovation Centre for Electronic Resources) Ticerはデジタル・ライブラリを構築できる図書館員を育成するための2週間のサマースクールを開いているそうで、今回のセミナーではその内容をかいま見ることができました。

最初にティルブルグ大学図書館長のMel Collierさんの「デジタル時代に図書館はどのように変化しているか」「戦略と管理」というテーマの講義がありました。デジタル時代の図書館の変化を様々な切り口から捉えて、デジタル・ライブラリにおけるその変化へのアプローチの仕方について語られました。

次にカリフォルニア大学バークレー校(UCB)の副図書館長兼東アジア図書館長のPeter Zhouさんの「デジタルライブラリの管理とサービスモデル」というテーマの講義では色々なデジタルコンテンツの紹介がありました。その中でも料金ベースでないオープンアクセスウェブを通じて利用できるものについて、UCBでの例(California Heritage ProjectやThe Making of American II)を挙げ詳しく述べられていました。

最後はスウェーデン王立図書館のKari Stangeさんの「電子リソースのライセンシング」というテーマの講義でした。電子環境下における他の図書館への文書の提供についてなど、実際の業務に役立つ話を聞くことができました。

その後参加者をいくつかのグループに分けてのワークショップがありました。詳しいシチュエーションを与えられたある架空の大学の図書館を発展させるために戦略計画のアドバイスをするというケーススタディでした。課題は大変難しく正解がすぐに

出るというものではありませんでしたが、セミナーに能動的に参加しているということを実感できてとても楽しいものでした。今回のセミナーには大学図書館に限らず企業の専門図書館等からも多数参加されていて、違った立場の方の意見を聞くと異なった視点から物事を見ることができました。

このセミナーの中ではZhouさんの「倉庫からゲートウェイへの図書館のパラダイムシフト」という言葉が図書館の変化を象徴していて特に印象に残りました。またCollierさんの言葉に「速すぎず、遅すぎず」というものがありました。急ぎすぎると利用者はついてこられないし、ゆっくりしすぎていると変化の波に乗り遅れることを頭に置いておく必要があるというお話でした。またコンソーシアムに関心が集まっているという感を強く持ちました。コンソーシアムについてはコスト削減を迫られるなかで高額な電子ジャーナルの利用を考えると出版社との交渉が有利になるという良い面がある一方、内部での調整が困難なこともあることなどを深く考えさせられました。専門図書館等からは国立大学には国立大学図書館協議会タスクフォースが設置されているがそれ以外の図書館がコンソーシアムを組むにはどうしたらうまくいくかといった声も聞かれ、枠組みを超えることの難しさも感じました。

図書館が激変期を迎えていることは間違いありません。変化について行くためには利用者への働きかけも必要ですが自己研鑽も欠かせません。このセミナーで学んだことを少しでも日々の業務の中で生かせればと思っています。

(ふくい みのり 情報サービス課学術情報係)

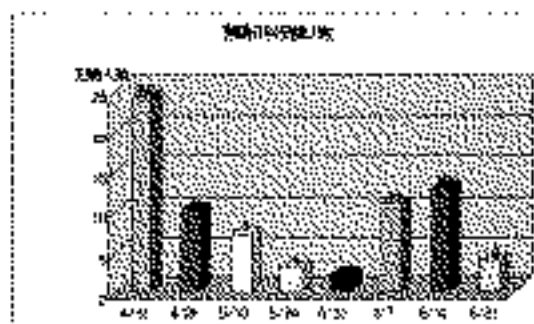
農学部分館での図書館利用指導の実施について

農学部分館での新入生ガイダンスの図書館利用指導が今年度からクラス別に実施されました。

6クラスに分けられて、4月19日から6月21日まで約1時間程度の予定で実施しました。内容は、図書館全般の利用説明と図書館システムを使った文献検索等(主にOPACの使い方)の方法についての説明と実習でした。

今回の図書館利用指導には、74名参加されました。

開講日別受講人数は下記の図のとおりです。来年度も多数の受講者を期待しています!!



附属図書館本館の臨時休館

構内停電のため下記のとおり臨時休館します。
平成14年11月4日（月：振替休日）

附属図書館本館の臨時開館

本学の開学記念日は附属図書館の休館日ですが、今年度は平常どおり授業が行われるため、臨時に開館することにいたします。
臨時開館日 平成14年11月11日（月）
開館時間 9：00～22：00

附属図書館委員会

平成14年度第2回附属図書館委員会

日時 平成14年9月18日（水）

場所 附属図書館視聴覚室

議事

[報告事項]

1. 平成14年度共通経費要求事項について
2. 将来計画委員会報告
3. 第50回中国四国地区大学図書館協議会総会及び第29回国立大学図書館協議会中四国地区協議会について
4. 平成14年度国立大学附属図書館事務部課長会議について
5. 第49回（平成14年度）国立大学図書館協議会総会について
6. 平成14年度間接経費の配分について
7. 平成14年度歳出予算の追加配分（留学生経費）について
8. 英文利用案内の作成について
9. 教育環境改善に係る整備計画について
10. 愛媛大学附属図書館ホームページ運営委員会の設置等について
11. 各分館からの報告
12. その他

[協議事項]

1. 附属図書館の中期目標・中期計画について
2. 将来計画委員会の今後の進め方について

図書館日誌(会議、研修)

- | | |
|----------------|---|
| 6月21日 | 第39回愛媛県図書館講習会実施委員会 学術情報係長出席 |
| 6月24日
～7月4日 | 平成14年度中学校教科書展示会 |
| 6月24日
～26日 | 第2回四国地区女性職員キャリアアップ研修(高松)池内主任出席 |
| 6月28日 | 平成14年度第2回医学部図書・情報委員会 |
| 7月4日 | 「明日のリーダーのためのデジタル・ライブラリ管理」セミナー(大阪)福居係員出席 |
| 7月22日 | 平成14年度愛媛地区大学図書館協議会総会 |
| 7月25日 | 第4回農学部分館運営委員会 |
| 7月29日
～8月9日 | 平成14年度学校図書館司書講習 |
| 8月21日
～23日 | 目録システム地域講習会(愛媛大学総合情報処理センター) |
| 8月22日 | 愛媛県図書館講習会(松山・ひめぎんホール)学術情報係長出席 |
| 8月26日 | 第5回法人格取得問題に関する附属図書館懇談会(東京)図書館長、事務部長出席 |
| 8月28日
～29日 | 電子ジャーナル・ユーザー教育担当者研修会(大阪)福居係員出席 |
| 8月28日
～30日 | 図書館等職員著作権実務講習会(広島)三浦係員出席 |
| 9月18日 | 平成14年度第2回図書館委員会 |